

## トルコ紀行その2

（株）復建技術コンサルタント 太田 保

私は今回、日本応用地質学会主催の第7回海外応用地質学調査団の一員として6月15日～6月29日の15日間にわたり、トルコ及びギリシャ方面の研修に参加しました。その1として研修地のアナトリア断層について語りました。

今回は最近のトルコ事情等について語ります。

## 《参加メンバーの紹介》

前回では参加メンバーの一部は紹介しましたがここで少し詳しく説明します。

団長の小島会長はギリシャのシンボジュームのみで、残念ながら不参加でした。

副団長の井上国際委員会委員長が実質的な団長でボスの風格が充分でした。

リーダーは四国からこられた元登山家でネパールの経験が豊かな人でした。

他の14人はコンサルタント関係や電力関係とゼネコン1人でいくつかのグループは出来ましたがお互い和気あいあいと楽しく旅行し、親睦を深めました。

私は二人部屋でしたので何回かメンバーも変わり、特に親睦が深まりました。

お互いに2週間にも及ぶ旅をしていると各個人が持ついろいろな面が時々見られ人

間の観察にも役だった旅でもありました。

この他、日本から相撲取りのような添乗員が一人つきましたがいい加減な国を旅するとあって飛行機の搭乗手続きやホテルの予約に四苦八苦し、気の休まる時が無かったのではと同情しました。どの道も厳しいのです。

アナトリア断層の案内者のバルカ教授と現地案内人のアプリ氏については前回紹介しましたので省略します。写真で見てください。

我々のバスの運転手は世界一運転がうまいのではないかと関心しました。交通規則無視の路上駐車狭い道をcm単位で切り返して通過する技術はさすが。

東京で行われた視察の中間報告会では参加した皆さんのニックネームを紹介した所、良く特徴を捕まえているとなかなかの評判でした。

## 《カルチャーショックのイスタンブール》

トルコの大坂、トルコの香港と言う感じの都市でアジアの北西端にあたり、オリエント急行のヨーロッパ側最終駅のある都市です。東洋と西洋の接点となっており、飛んでイスタンブールのイメージが良く合い

ます。

私の最もカルチャーショックを受けた都市です。何故か。

私を初め日本人の意識にある海外はアメリカ、ヨーロッパですから空の色、肌を感じず乾いた暑さ、眼孔鋭いヒゲをはやした褐色の顔、分からない言葉で叫ぶ声等々と頭や皮膚にがーんと利いて、あぁーこれがトルコかの一言です。

このショックは旧市街の中心にある宿泊ホテルのマルマラホテル（五つ星）に荷を解き周辺を散策した時には頂点に達しました。ホテルの立つ小高い丘から海に延びる坂道は石畳の道で中央に市電が走る狭い道路です。歩道も無いようなもので、この両側には古い石造りのホテルや商店が連なり、アメリカの摩天楼のミニ版といった感じですが。ここに、空港以上の人が湧いてくるように群がり、騒音、人いきれ、物売りの少年、乞食、タバコの煙、シンカバブーのにおい等々、常に眼孔鋭い目で見られている感じでカメラを向けるのが怖く市内の様子を撮影する場合も人通りが少なくなった瞬間です。

車社会のためか、交通ルールが無いのか、歩道についた信号は守られないし、かってきまみにスイスイと横断する。この度胸とうまきに舌を巻いてしまう。

この夜、ホテルでハガキを書きまくりこのカルチャーショックを伝えました。イスタンブールの女性は布で顔を覆ったりはせ

ず、目鼻立ちがすっきりとした美人揃いでこの雑踏になれると眼光鋭い男性の存在も少しは気にならなくなります。現地案内人のアプリ氏もこの風貌ですが優しい紳士でした。

また、この都市は歴史の狭間にあり、居並ぶモスクの多さと立派さには驚かされます。しかし、代表的モスクであるブルーモスクやアヤソフィアでは現在は完全に観光対象のモスクで、内部にはローマ帝国時代のキリスト教の影響が漆喰の下から覗いています。ここには世界のいたる所から観光客がやってきます。土産売りの少年が千円で10枚、安いよ、買って行けなど言葉巧みに近づき離れない。また、日本の観光客は簡単に買ってしまうので格好のターゲットとなっているようで蠅のように離れません。

モスクの一部には地震により柱が曲がっているのも多く見られますがなかなか崩壊しないようで、ドームの形状によるものか丈夫なものです。日本ならば危険構造物と言う事で立ち入り禁止となるでしょう。ドーム中央部では50mもの足場を作り、修復中で整然と組まれた足場を見ると日本の企業が請け負っているのではと考えますが詳細は不明です。これに対して、市内の建物の修復現場の足場は木で雑然としており、トルコ気質そのままという感じで対照的でした。

#### 《トルコの気候と植相》

この地方は地中海性気候のため気温は

40°にも達し、紫外線が強いとは感じますが湿度が極端に低いため、さほど暑さは感じません。木陰では非常に涼しく感じます。首都のアンカラや東部では大陸性気候で雪も降ります。

この地方の山地はさほど高くなく、全体がオリーブ、ブドウ、イチヂクなどの果樹園として利用されています。元々は糸杉、ポプラ、プラタナスなどの高い木々に覆われていたようですが紀元前2000年から始まる歴史の中で伐採され、植林すると言う概念がないためなのか耕作地として利用されてきたためか森林というものとは認められません。

イスタンブールから西に向かうにつれ、植相も貧弱になり畑が一面に広がって乾燥地帯のアンカラ南東部では大規模な塩湖があり塩が生産されています。

この地帯を日本と対比すると北海道の富良野付近の畑地帯を大規模にした感じで何処までも畑が続きます。しかし、働いている人を殆ど見ないのは不思議です。

シルクロードの西の端ですので小隊宿の跡などもあり、エキゾチックです。

#### 《洞窟と奇岩のカップパドキア》

ここはトルコのほぼ中央部に位置し、シルクロードの西端にもあたります。この地方は凝灰岩が広く分布し風化、硬さ、構成物質の違いによりいろいろな形の奇岩が広い範囲にわたり分布しています。また、地下都市と呼ばれる人工的に構築された洞窟

が多く見られ内部にあるギリシャ正教の教会跡や壁画が有名で日本人観光客も多く訪れる観光地です。この地方は紀元前からの宗教変遷が色濃く残っている地方でもあります。冬には雪が降り、ロマンチックとか。

地下都市はイスラム教徒からの迫害を防ぐための都市で地下6階まであり、内部は迷路となっており、武器を持った兵士が通れないように狭い通路にしたり、入り口を塞ぐ大きな石の扉があったりの工夫が施されています。この他、生活に密着した施設としてはワインの製造場や食堂、台所などが整備されています。トイレもあり、この処理は中央の通気孔を通して屋外に排出するなど衛生面にも配慮されています。この石は日本で言う大谷石そっくりの溶結凝灰岩状の軟岩で掘削しやすかったものと考えられます。

イスラム教徒が攻めて来た時、村単位で逃げ込み普段は地上で生活し、この地下都市は倉庫として利用されたそうです。現在は観光資源として利用しています。

大型バスがどんどん乗り付け、いろいろな国からの観光客が来ますが日本人は特に多かった気がします。ところで、スカート姿の女性はどんな格好でこの狭い地下に入るのか少し気になります。又、入り口に鉄砲を持った兵士がにらみをきかせています。それは、クルド人が多く治安が悪いためと言われています。

山全体のいたるところに掘られた空洞は

城塞の様ですが、今世紀の初めまでギリシャ正教の人達が住んでいたそうです。トルコとギリシャの領土戦争で強制送還されたため現在は誰も住んでいません。今でも両国の仲は悪いそうです。

空洞の中には地下教会が多く見られ、キリスト像などの宗教色の強い壁画が多く残されていますがほとんどはイスラム教徒により破壊されたり、汚されています。この内、比較的保存状態の良いものは観光資源として公開されています。宗教色の強いヨーロッパ系の観光客には人気があり、待たされる教会跡地もあります。我々には宗教心が薄いため美術品を見る感覚です。

全ての地下都市や教会跡地に共通するのは壁画とワイン工場が存在する事でワインはキリスト教、ヨーロッパ人には欠かせないものであったようです。この地方のワインは水の値段とほぼ同じか安いといわれている事がうなずけます。我々日本人の中にもワイン通と言われる人々も最近多くなっていますが宗教心が薄い日本人ではワインの核心にはふれる事が出来ないように思います。これらの、壁画についても同様です。

この地方のもう一つの特徴である奇岩の分布ですが至る所にあるように感じましたが観光のスポットとなる最も有名な場所は5箇所程度の様で、同じバスに行く先々で会います。

この奇岩は褐色でゴツゴツした岩石を帽

子のようにかぶった紡錘形の柱です。この内、ラクダの形のものや3本が競いあうように立ったものが有名な様で駐車場があり、地元の土産物売りや観光用ラクダがたむろしています。ラクダにのるような優雅な旅をしない観光客相手によく生活がなりたつものだと関心しています。目の前でラクダに乗った人はいません。ラクダも観光客が来ると立ち上がりますが乗る気配がないと足を折り畳ん正座するように寝てしまいます。

この奇岩の他に、白色の柱状部分が風化浸食により削られて幻想的な紡錘形の集合体ができます。なぜこのような形になったのか地質屋の集団である我々は早速に議論しましたが結論は出ていません。これが良いのです。常に結論は先に延ばす。これがこの地方のスタイルです。実際にハンマーでこの石の性状を調査できなかったのは地質屋として誠に残念ですがこれも観光資源保護の面では良かったのかもしれない。

この地方は大陸性気候ですので朝晩の温度差や夏冬の温度差が激しく冬には雪が降り寒いそうです。これもこのような奇岩を形成する要因のような気がします。

全体的にはフラットに堆積した凝灰岩や凝灰角礫岩で水平方向に縞模様が見られます。これが、この地方の全体として緩やかな地形の原因ではないか。

この時期の気候はイスタンブールと同じような気がします。乾いています。近くに

は塩湖があり、岩塩を生産し、トルコ全体の消費をまかなっています。この湖も観光資源です。

#### 《商人こそ男の商売》

中近東と言うかイスラムの世界では商人こそ男のやる仕事で生産するのは女の仕事という意識が非常に強いと聞いております。また、商売が非常にうまい。その実例を今回の視察旅行の例で示します。日本では良い製品を生産する事こそ男の、技術者の誇りで売るとは何か胡散臭いとのイメージとは大きく違います。

#### 実例1…現地ツアーコンダクターのコース設定の妙

イスタンブールの市内事情視察でオールドバザールは危険がいっぱいと言う理由で見ただけ、買い物は安全なアジアンバザールでとボツボラス海峡の水上クルーズの後に設定し買い気のある我々はすっかり後先も考えずに買ってしまいました。やっぱり多少危険があってもバザールでゴザールのオールドバザールで買い物をして見たかったというのが実感です。

その後、強行軍でメインの断層視察が入り、ホットしたカッパドキア視察の午後には最も高価なトルコジュータンの工場付き販売店、次の午前中がトルコ石、セラミック陶器の店に案内するコース取りの妙には全員すっかりはまってしまい大金を投入。コンダクターの-marginもどっさりでは。

#### 実例2…トルコジュータン売りの妙

バスが着くと日本語ペラペラのおじさんがニコニコ顔で出迎え、早速美人の織り子をそろえた織り場に案内、何故このジュータンが優秀で時間が掛かるかを説明、次は繭からの糸紡ぎ、草木染め、糸の撚りの多さを強調し最後が展示場兼売場でこのおじさんがお茶、ワインを奨めながら安いジュータンからどんどん言葉巧みに高いものへと展示場いっぱい広げる。最も高い絹のジュータンは最後に出す。我々の目にもはっきり絹が良い事が分かる。ここで日本語をマスターした売り子の兄ちゃんがどっと寄ってきて個別交渉が開始。日本の三越デパートでは3倍の値段、大手商社の丸紅経由で安心させ、売値12万円以上の高額商品はくろねこヤマトの宅急便で自宅にお届けと我々を安心させる。安い商品は下の方で見れないし、もう目は絹のジュータンへ。もっと高い物を買いたいお客は別室で交渉。結局ここで我々は全体で100万円ほど買ってしまいました。高い買い物か安い買い物か自分自身で判断するしかない。私も7万円程度のものを買ったが、日本の税関対策用の領収書は現地価格で30,000,000トルコリラ（日本円で約3万円）、これが実勢価格なのかも。このジュータンは現在我が家の玄関マット（本人のみ高額と思い気に入っているが）で実用品として頑張っています。

後で団長の小島東大教授のお話で判明した事ですがこのジュータン売りのおじさん

は東京大学で地震学博士号を取得したとの事で一同啞然とした次第です。

この商法はトルコ石屋、陶磁器屋でも同様で難しい日本語をこの先生を講師に良くマスターしたもので商売とは言え驚きました。我々の英語はダメですね。

#### 《本場のトルコ風呂とは》

日本で言われているトルコ風呂はトルコ人にとってはとんでもない国辱的な言葉で日本の女性は全て芸者と言われているようなものです。先に述べたシュータン売りの博士が日本留学中に日本政府に抗議したそうです。

ここの風呂の正式名称はハمامと言い蒸し風呂です。男性がマッサージなどをしてくれるそうで高級ホテルや都市には必ずあります。しかし、所要時間は2時間くらいかかるそうで何度か挑戦しようとしていましたが急ぎ旅の我々にはついに経験するチャンスがありませんでした。全く残念です。ゆっくり旅なら可能。

#### 《妖しく踊るベリーダンス》

アラブ、イスラムの夜を妖しく演出するベリーダンス、イスラム特有の音楽に乗り薄暗いステージで妖しく腰を振り観客の男性を挑発する。元アメリカの国務大臣キッシンジャーが最も好きだったと言う踊りを身近で6,000円を支払って鑑賞しました。

なかなか、良いものです。観客は女性も多くディナーショーといった趣です。

現地案内人のアブリ氏によればジプシーのベリーダンスが最高なのだそうです。腰

を激しく振り、身に付けている衣装が取れそうで取れない所が男性の官能をくすぐるようです。

首都アンカラのホテルでも見ましたが踊り手により雲泥の差があるようです。

踊り子と一緒に取られた写真が5ドルで売られており当然記念に買いました。

ベリーダンスの話が出たところで今回の報告を終わります。

#### 《おわりに》

飽きずに読んでいただいた皆様に、トルコは良いよ、一度は行ってらっしゃい。

今度、関西空港から南回りの格安ツアーが出来たそうです。なお、治安上からはこのカッパドキヤ地方までが海外観光の限界といわれていますが、トルコに取り付かれた人は国境近くのクルドの居住区がたまらないともいいます。

今回の旅行を通じて感じた事は海外旅行は西洋の国々だけではなく、このように東西の狭間にある歴史の国、最近経済成長がめざましい、アセアンの各国、アンデス文化の地、南アメリカ、黒い大陸アフリカ、大人の隣国中国、同種民族韓国、にわか自由主義国ロシアなど生きている限り行きたい国はたくさんあります。

しかし、年老いても安心して行ける国だけではありませんので少しでも若い内に地球を歩きたいものと考えています。

今後も発行される大地に紀行文を載せ続けられればと人生に悔いは無いと考えています。



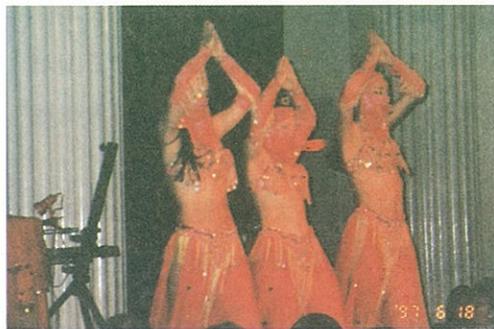
参加者集合写真、後列中央アブリ氏、前列右端2番目バルカ氏。副団長他1名学会のため不在



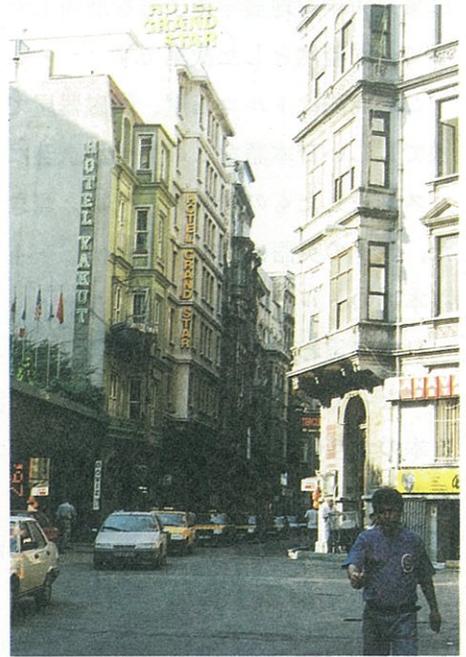
イスタンブールで有名なブルーモスク（観光地）



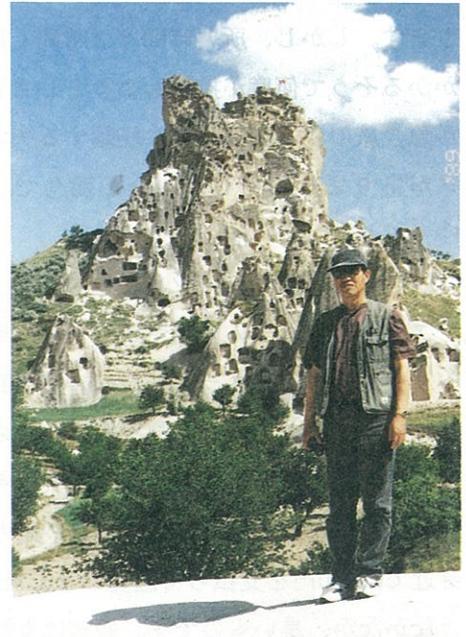
ジュータン売りのドクターと日本語が達人な社員



イスタンブールのベリーダンス。ソロダンサーは別



アガサクリスティゆかりのホテルと旧市街の様子



カッパドキアの洞窟群と筆者。洞窟は現在無人